

# 単身高齢者の生活上のリスクと生きがいに関する国際比較 — 4 か国比較 —

日本福祉大学福祉経営学部教授／みずほ情報総研株式会社主席研究員  
藤森克彦

## 1. はじめに

日本では、欧米諸国に比べて、高齢者の抱える生活上のリスクに対して、家族が対応してきた面が強い。しかし近年日本においても、単身高齢者（一人暮らし高齢者）が急増している。単身高齢者は少なくとも同居家族がいないので、孤立、要介護時の対応、貧困といった点で二人以上世帯よりもリスクが高く、対応が困難なことが考えられる。

そこで本稿では、4か国の単身高齢者について、①他者とのつながり、②身体機能が低下した場合の居住場所、③経済的状況、といった点を比較する。次に、各国の単身高齢者の生きがいの保有率をみた上で、他者とのつながり、健康状況、経済状況などと生きがいとの関連性を考察する<sup>1</sup>。

## 2. 単身高齢者の出現率と属性

本論に入る前に、単身高齢者の出現率と属性をみていこう。まず、高齢者（60歳以上）に占める単身高齢者の割合をみると、ドイツ 40.7%、アメリカ 35.9%、スウェーデン 30.0%、日本 13.3%となっている。日本は4か国の中で、高齢者に占める一人暮らしの出現率が最も低い（図表1）。高齢者が属する他の世帯類型の割合をみると、日本は、二世帯世帯（子と同居）と三世帯世帯（本人と子と孫の同居）の比率が高くなっている。つまり、日本の高齢者は子との同居比率が他国に比べて高い。

図表1 高齢者(60歳以上)の世帯類型別割合

	単身世帯	夫婦 二人世帯	二世帯世帯 (親と同居)	二世帯世帯 (子と同居)	三世帯 世帯	その他	無回答
日本 (n=1367)	13.3%	38.9%	4.5%	26.6%	9.6%	6.4%	0.7%
アメリカ (n=1006)	35.9%	43.7%	1.1%	7.7%	4.5%	5.8%	1.4%
ドイツ (n=1043)	40.7%	48.2%	0.5%	6.8%	1.3%	1.8%	0.6%
スウェーデン (n=1528)	30.0%	63.7%	-	2.2%	0.7%	2.0%	1.4%

(注) F4 (家族との同居の状況) より作成。

次に、各国の単身高齢者の属性をみていこう。単身高齢者に占める女性の比率をみると、日本は、4か国の中で最も低い比率である<sup>2</sup>（図表2）。換言すれば、日本は単身高齢者に占める男性の比率が他国よりも高い。また、単身高齢者に占める75歳以上の割合をみると、日本はアメリカ、スウェーデンに次いで、3番目の比率である<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 本稿の分析においては、「不明」「無回答」を欠損値として扱っている。そのため、巻末の「基本軸クロス集計表」の数値と若干の差異が生じることがある。

<sup>2</sup> ちなみに、2015年調査（第8回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査）において、単身高齢者に占める女性比率は、ドイツ 76.0%、日本 69.6%、スウェーデン 64.3%、アメリカ 55.1%となっていて、日本がドイツに次いで高い水準であった。

<sup>3</sup> 2015年調査における単身高齢者に占める75歳以上の比率をみると、日本 53.2%、アメリカ 45.7%、ドイツ 42.1%、スウェーデン 38.8%となっていて、日本の比率が最も高かった。

単身高齢者の配偶関係をみると、日本は未婚者の比率が27.5%となっており、4か国の中で最も高い。一方、単身高齢者に占める離別者の割合をみると、日本は23.1%となっていて、4か国の中で最も低い。

さらに、単身高齢者の中で子どものいない人の割合をみると、日本36.4%となっている。他の3か国が2割前後なのに対して、日本は子どものいない単身高齢者の比率が高い。この背景の一つとして、日本では単身高齢者に占める未婚者の比率が高いことの影響などが考えられる。

以上のように、日本の単身高齢者は、未婚者の比率が高く、離別者の比率が低い。また、子どものいない人の比率が高いことなどが、他の3か国と比較した特徴と考えられる。今後、未婚の単身高齢者が一層増えていくことが推計されている。未婚の単身高齢者は配偶者だけでなく、子どもがいないことが考えられる。老後を家族に頼ることが一層難しくなるので、家族以外の関係性を高めることが必要であろう。

図表2 単身高齢者の属性

	女性の比率	75歳以上の比率	配偶関係（各国合計：100%）				子供なし
			未婚	有配偶	離別	死別	
日本 (n=182)	59.9%	44.5%	27.5%	3.8%	23.1%	45.6%	36.4%
アメリカ (n=361)	67.3%	54.3%	12.5%	3.0%	29.1%	55.1%	21.0%
ドイツ (n=425)	67.3%	40.9%	13.6%	2.6%	34.8%	48.9%	19.1%
スウェーデン (n=458)	61.8%	47.4%	13.0%	4.5%	39.8%	42.7%	20.4%

- (注) 1. 括弧内のn数は、属性に関する各国のn数を示している。しかし、いくつかの項目でn数が若干異なる。具体的には、スウェーデンの「配偶関係」についてのn数は445である。また、「子供なし」のn数は、日本n=176、アメリカn=347、ドイツn=425、スウェーデンn=446である。
2. F1（性別）、F2（年齢）、F3（結婚の状況）、F4（家族との同居の状況）、F5（子どもの有無）より作成。

### 3. 単身高齢者の他者とのつながり

#### (1) 他者との交流

次に、単身高齢者の他者とのつながりをみていこう。

まず、他者との交流について、各国の単身高齢者に「ふだんどの程度人（同居の家族、ホームヘルパー等を含む）と直接会って話をするか」（Q26）を尋ねると、日本は4か国の中で最も会話頻度が低い。具体的には、「ほとんど毎日」の割合は日本は23.7%であり、他の3か国の半分以下の比率である。一方、会話頻度が「ほとんどない」の割合は、日本は25.4%と4か国の中で最も高い（図表3）。

では、直接会っての対話ではなく、情報機器の利用による家族・友人などとの連絡状況はどのようになっているのだろうか。単身高齢者の情報機器の利用状況をみると、日本は、他の3か国に比べて、パソコンの電子メールやSNSを使用する人の割合が著しく低い（図表4）。この傾向は、単身高齢者のみならず、二人以上世帯に属する高齢者についても同様の傾向がみられる。

図表3 人との会話頻度(Q26)

	単身世帯					合計	二人以上世帯(参考)					合計
	ほとんど毎日	週に4、5回	週に2、3回	週に1回	ほとんどない		ほとんど毎日	週に4、5回	週に2、3回	週に1回	ほとんどない	
日本	23.7%	12.4%	22.6%	15.8%	25.4%	100% (n=177)	81.6%	4.4%	5.1%	3.8%	5.1%	100% (n=1148)
アメリカ	48.5%	10.1%	15.2%	13.5%	12.7%	100% (n=355)	80.1%	5.1%	6.7%	3.3%	4.8%	100% (n=628)
ドイツ	48.5%	17.3%	19.9%	8.0%	6.4%	100% (n=423)	76.1%	5.6%	10.0%	4.7%	3.6%	100% (n=611)
スウェーデン	52.2%	9.6%	13.5%	10.3%	14.3%	100% (n=446)	77.2%	5.9%	5.0%	3.7%	8.3%	100% (n=1006)
	p<0.001						p<0.001					

(注)「普段どの程度人(同居の家族、ホームヘルパー等を含む)と直接会って話すか」に対する回答。

図表4 情報機器の利用状況(Q34)

	単身世帯			二人以上世帯(参考)		
	PCメールで家族・友人等と連絡	携帯電話、スマホで家族・友人等と連絡	SNSを利用する	PCメールで家族・友人等と連絡	携帯電話、スマホで家族・友人等と連絡	SNSを利用する
日本	9.3%	70.3%	9.3%	15.8%	78.7%	13.1%
アメリカ	57.1%	76.2%	37.4%	68.1%	84.3%	48.2%
ドイツ	31.8%	75.5%	24.9%	47.7%	81.4%	25.0%
スウェーデン	38.6%	84.7%	46.1%	54.5%	90.2%	57.3%
	p<0.001	p<0.001	p<0.001	p<0.001	p<0.001	p<0.001

(注)複数回答可。

## (2) 頼れる人の有無

次に、各国の単身高齢者に「病気のときや、一人ではできない日常生活に必要な作業(電球の交換や庭の手入れなど)が必要なとき、同居の家族以外に頼れる人がいるか」(複数回答)(Q27)を尋ねると、日本は「頼れる人なし」の比率が21.4%にのぼり、4か国の中で最も高い(図表5)。

一方、「友人」と回答した人の割合は、日本は20.3%なのに対して、他の3か国は3割弱から5割弱の高い水準となっている。また、「近所の人」と回答した人の割合についても、日本は17.6%なのに対して、他の3か国は2割強から4割強の高い水準である。

なお、近所付き合いについては他の設問でも尋ねられている。近所の人と「病気の時に助け合う」関係があると回答した単身高齢者の割合は、アメリカ35.7%、ドイツ32.7%、スウェーデン9.8%、日本7.7%となっていて、日本の比率が最も低い(Q28-5)。さらに、近所の人と「相談ごとがあった時に、相談したり、相談されたりする」関係があると回答した単身高齢者の割合は、ドイツ40.9%、アメリカ39.1%、日本24.2%、スウェーデン18.3%となっている(Q28-3)。

また、「友人関係」について、「あなたは、家族以外の人で相談し合ったり、世話をし合ったりする親しい友人がいるか」(Q29)を尋ねると、「(同性・異性) いずれもない」という回答が、日本31.1%、アメリカ13.3%、ドイツ12.5%、スウェーデン10.2%となっている。日本では、

相談したり世話をしあえる友人関係をもたない人の比率が4か国の中で最も高い。したがって、日本の単身高齢者は他国に比べて、友人や近所とのインフォーマルな関係性が弱いことが推察される。

図表5 病気や日常生活に必要な作業を同居の家族以外に頼れる人の有無(複数回答)(Q27)

	単身世帯					n	二人以上世帯(参考)					n
	別居家族	友人	近所の人	その他	頼れる人なし		別居家族	友人	近所の人	その他	頼れる人なし	
日本	53.3%	20.3%	17.6%	10.4%	21.4%	182	64.5%	14.0%	14.6%	9.4%	17.0%	1175
アメリカ	55.1%	38.5%	36.3%	14.4%	14.7%	361	56.9%	36.1%	32.5%	15.5%	16.2%	631
ドイツ	67.3%	48.9%	43.3%	7.3%	5.2%	425	78.1%	44.3%	37.9%	3.4%	5.1%	612
スウェーデン	61.6%	28.8%	21.2%	11.4%	14.2%	458	68.2%	23.1%	19.7%	5.2%	18.9%	1048
	p<0.01	p<0.001	p<0.001	p<0.05	p<0.001		p<0.001	p<0.001	p<0.001	p<0.001	p<0.001	

(注)「あなたは、病気のとときや、一人ではできない日常生活に必要な作業(電球の交換や庭の手入れなど)が必要なとき、同居の家族以外に頼れる人がいますか」(複数回答)に対する回答結果(Q27)。

### (3) 家族や親族の中での役割の有無

次に、単身高齢者について「家族や親族の中でどのような役割を果たしているのか」(Q1)を尋ねると、日本の単身高齢者は「特に役割はない」と回答する比率が4か国の中で最も高い(図表6)。この背景の一つとして、日本の単身高齢者は、未婚者や子どものいない人の比率が高いことの影響が考えられる。

図表6 家族や親族の中で「特に役割はない」と答えた人の比率(Q1)

	単身世帯		二人以上世帯(参考)	
	%	n	%	n
日本	42.9%	182	13.4%	1175
アメリカ	6.1%	361	2.7%	631
ドイツ	14.6%	425	4.4%	612
スウェーデン	14.6%	458	5.2%	1048
	p<0.001		p<0.001	

### (4) 社会参加

各国の単身高齢者に「福祉や環境を改善することなどを目的としたボランティア活動その他の社会活動を行なっているか」(Q30)を尋ねると、「以前は参加していたが、今は参加していない」あるいは「全く参加したことがない」と回答した人の合計は、ドイツ(70.6%)、日本(64.3%)、スウェーデン(58.1%)、アメリカ(41.3%)となっていて、日本はドイツに次いで社会参加していない単身高齢者の比率が高い(図表7)。

次に、「以前は参加していたが、今は参加していない」あるいは「全く参加したことがない」と回答した単身高齢者に、「参加していない理由」(Q31)を尋ねると、日本の単身高齢者では上位3項目として「健康上の理由、体力に自信がない」(41.9%)、「経済的に余裕がない」(25.6%)、「時間的・精神的にゆとりがない」(17.1%)があげられている(図表8)。他の3か国でも「健康上の理由、体力に自信がない」という理由は上位3位にあげられているが、「経済的余裕がな

い」「時間的・精神的ゆとりがない」はあげられていない。その代わりに、他の3か国では「関心がない」「他にやりたいことがある」という回答が上位3位に入っている。日本の単身高齢者があげる「経済的余裕がない」「時間的・精神的ゆとりがない」という理由は、日本の特徴を示す理由ではないかと考えられる。

図表7 ボランティア活動その他の社会活動への参加(Q30)

	単身高齢者			n	二人以上世帯(参考)			n
	現在、参加していない	以前は参加、今は参加していない	全く参加したことがない		現在、参加していない	以前は参加、今は参加していない	全く参加したことがない	
日本	64.3	24.2%	40.1%	182	52.4	18.2%	34.2%	1175
アメリカ	41.3	20.8%	20.5%	361	32.0	13.6%	18.4%	631
ドイツ	70.6	27.1%	43.5%	425	63.1	22.7%	40.4%	612
スウェーデン	58.1	16.2%	41.9%	458	51.6	13.1%	38.5%	1048
	—	p<0.01	p<0.001		—	p<0.001	p<0.001	

(注)「あなたは福祉や環境を改善することなどを目的としたボランティア活動その他の社会活動を行っていますか」(Q30)という設問に対して、「以前は参加、今は参加していない」「全く参加したことがない」という回答者の割合。

図表8 社会活動に参加しない理由(上位3位)(複数回答)(Q31)

	単身高齢者			二人以上世帯(参考)		
	順位	理由	割合	順位	理由	割合
日本	①	健康上の理由、体力に自信がない	41.9%	①	健康上の理由、体力に自信がない	33.0%
	②	経済的余裕がない	25.6%	②	時間的・精神的にゆとりがない	27.1%
	③	時間的・精神的にゆとりがない	17.1%	③	団体内での人間関係がわずらわしい	17.0%
アメリカ	①	関心がない	32.9%	①	関心がない	29.7%
	②	健康上の理由、体力に自信がない	29.5%	②	その他	26.2%
	③	その他	28.2%	③	他にやりたいことがある	25.7%
ドイツ	①	関心がない	31.7%	①	関心がない	34.7%
	②	健康上の理由、体力に自信がない	26.0%	②	他にやりたいことがある	19.7%
	③	他にやりたいことがある	24.0%	③	健康上の理由、体力に自信がない	17.6%
スウェーデン	①	他にやりたいことがある	35.7%	①	他にやりたいことがある	41.2%
	②	関心がない	26.7%	②	関心がない	27.5%
	③	健康上の理由、体力に自信がない	23.3%	③	家族の介護をしている	25.9%

(注)「あなたは福祉や環境を改善することなどを目的としたボランティア活動その他の社会活動を行っていますか」(Q30)という設問に対して、「以前は参加、今は参加していない」「全く参加したことがない」という回答した人を対象に、さらに「あなたがこのような社会活動に現在参加していない理由をお答え下さい」(Q31)を尋ねた(複数回答)。

#### 4. 身体機能が低下した場合に単身高齢者が希望する居住場所

各国の単身高齢者に「もし身体機能が低下して、車椅子や介助者が必要になった場合、自宅に留まりたいか、どこかに引っ越したいか」(Q23)を尋ねると、「自宅に留まりたい」という回答は、アメリカ74.1%、スウェーデン64.5%、ドイツ64.1%、日本44.1%になっていて、日本が最も低い(図表9)。一方、「高齢者用住宅あるいは老人ホームに入居したい」という回答は、日本39.1%、ドイツ24.9%、スウェーデン24.8%、アメリカ12.6%となっていて、日本が最も高い。

「自宅に留まりたい」という比率を単身世帯と二人以上世帯と比べると、日本の単身世帯の自宅居住希望の比率は、二人以上世帯よりも19%ポイントも低い。他の3か国では、単身世帯は二人以上世帯よりも7~10%ポイント程度低いにすぎない。日本の単身世帯は、二人以上世帯に比べて、自宅での居住継続希望が著しく低い。

この背景には、先述の通り、日本は他国に比べて、友人や近所の人とのインフォーマルな人間関係が弱いことが考えられる。また、住宅そのものが住みにくいことも考えられる。各国の単身高齢者に「身体機能が低下して、車いすや介助者が必要になった場合、住宅は住みやすいか」(Q22)を尋ねると、「問題がある<sup>4</sup>」という回答は、日本70.4%、ドイツ54.7%、スウェーデン43.2%、アメリカ36.4%となっていて、日本が最も高い<sup>5</sup>。

図表9 身体機能が低下した場合の居住場所(Q23)

	単身高齢者					合計	二人以上世帯(参考)					合計
	自宅に留まりたい	子供の住宅へ転居	高齢者用住宅/老人ホーム	病院	その他		自宅に留まりたい	子供の住宅へ転居	高齢者用住宅/老人ホーム	病院	その他	
日本	44.1%	1.7%	39.1%	6.7%	8.4%	100% (n=179)	63.1%	0.6%	26.6%	4.2%	5.4%	100% (n=1145)
アメリカ	74.1%	7.5%	12.6%	0.3%	5.5%	100% (n=348)	81.0%	3.7%	8.5%	0.0%	6.8%	100% (n=622)
ドイツ	64.1%	4.5%	24.9%	0.0%	6.4%	100% (n=421)	75.5%	3.6%	17.4%	0.0%	3.5%	100% (n=604)
スウェーデン	64.5%	1.6%	24.8%	0.4%	8.7%	100% (n=448)	74.7%	0.9%	15.3%	0.0%	9.1%	100% (n=1023)
	p<0.001						p<0.001					

- (注) 1. 「もし、あなたの身体の機能が低下して、車いすや介助者が必要になった場合、自宅に留まりたいですか。それともどこかへ引っ越したいですか」(Q23)に対する回答。  
 2. 「自宅に留まりたい」は、「現在のまま自宅に留まりたい」と「改築の上、自宅に留まりたい」の合計。  
 3. 「高齢者用住宅/老人ホーム」は、「高齢者用住宅へ引っ越したい」と「老人ホームへ入居したい」の合計。

## 5. 単身高齢者の経済的状況

### (1) 経済的困窮についての意識

各国の単身高齢者に「経済的な意味で、日々の暮らしに困ることがあるか」(Q12)を尋ねると、日本の単身高齢者の18.6%は「困っている」と回答していて、4か国の中で最も高い(図表10)。一方、「困っていない」という回答は、日本は25.4%であり、4か国の中で最も低い。したがって、日本の単身高齢者は、日々の生活に「困っている」という意識をもつ人の比率が他国に比べて高いことが考えられる。

これには様々な要因が考えられるが、今回の国際比較調査から推察される点をあげると、日本の単身高齢者は「老後の備えが十分でない」と回答する人の比率が高いことがある。「現在の貯蓄や資産は、今後あなたの老後の備えとして十分だと思うか」(Q14)を単身高齢者に尋ねると、「やや足りないと思う」「まったく足りないと思う」の合計は、日本54.8%、アメリカ21.6%、ドイツ25.0%、スウェーデン21.0%となっている。日本では、老後の備えが十分でないと考えた人の比率が著しく高く、他の3か国の2倍以上の水準にある。

<sup>4</sup> 「問題がある」は、「多少問題がある」と「非常に問題がある」の合計。

<sup>5</sup> さらに、介護サービスの利用頻度の違いが自宅での居住継続意向に影響を与えている可能性も考えられる。2020年調査では設問が変わったため調査ができなかったが、2015年調査では、他の3か国の「通所・在宅の福祉サービス」利用頻度は日本よりも高く、自宅での居住継続意向に影響を与えている可能性がある。具体的には、「通所・在宅の福祉サービス」を利用している単身高齢者に、その利用頻度を尋ねると、「ほぼ毎日」という回答が、アメリカ21.9%、ドイツ36.6%、スウェーデン33.7%、日本8.5%となっていた。

また、各国の単身高齢者に「あなたは50歳代までに、老後の経済生活に備えて特に何かをしてきたか」(Q13)を尋ねると、「特に何もしていない」という回答が、日本はスウェーデンと並んで高い。具体的には、日本37.9%、スウェーデン37.3%、ドイツ29.9%、アメリカ16.3%となっている。スウェーデンも50歳代までに老後の備えをしている人の比率が低い、高齢期に困窮意識をもつ人の比率は日本よりも著しく低い。この背景には、公的な支援が充実していることの影響が推察される。

図表 10 経済的困窮についての意識(Q12)

	単身世帯				合計	二人以上世帯(参考)				合計
	困っている	少し困っている	あまり困っていない	困っていない		困っている	少し困っている	あまり困っていない	困っていない	
日本	18.6%	26.6%	29.4%	25.4%	100% (n=177)	7.1%	25.9%	34.1%	32.9%	100% (n=1145)
アメリカ	5.8%	19.8%	24.2%	50.1%	100% (n=359)	2.7%	17.6%	21.2%	58.5%	100% (n=626)
ドイツ	6.1%	22.2%	33.3%	38.4%	100% (n=424)	2.1%	14.9%	29.6%	53.4%	100% (n=609)
スウェーデン	4.2%	17.2%	44.0%	34.6%	100% (n=448)	1.6%	8.9%	40.6%	48.8%	100% (n=1032)
	p<0.001					p<0.001				

(注)「あなたは、経済的な意味で、日々の暮らしに困ることがありますか」(Q12)に対する回答。

## (2) 高齢期の就労

そして、老後の備えが十分でない単身高齢者は、働き続けることで対応していると推察される。この点、単身高齢者に対して「70歳以降になって最終的に収入の伴う仕事を辞めた人」(Q17)の比率をみると、日本が8.2%となっていて、アメリカの11.9%に次いで高い水準にある(図表11)。また、「まだ仕事を辞めていない」という回答は、日本は18.4%となっていて、4か国の中で最も高い。しかも、「まだ仕事を辞めていない」単身高齢者の平均年齢をみると、日本68.3歳(n=301)、アメリカ66.8歳(n=173)、ドイツ63.6歳(n=188)、スウェーデン63.1歳(n=253)となっていて、日本が最も高い。

ちなみに、「今後、収入を伴う仕事をしたい(あるいは、仕事を続けたい)」と回答した単身高齢者にその理由を尋ねると(Q19)、「収入がほしいから」という回答は、日本63.1%、ドイツ41.2%、アメリカ32.6%、スウェーデン35.6%となっていて、日本が最も高い。

図表 11 最終的に収入を伴う仕事を辞めた年齢(Q17)

	単身世帯						二人以上世帯(参考)					
	60歳未満	60-64歳	65-69歳	70歳以降	まだ仕事を辞めていない	合計	60歳未満	60-64歳	65-69歳	70歳以降	まだ仕事を辞めていない	合計
日本	29.7%	24.7%	19.0%	8.2%	18.4%	100% (n=158)	24.8%	27.6%	15.2%	7.4%	25.1%	100% (n=1074)
アメリカ	26.1%	28.6%	21.0%	11.9%	12.5%	100% (n=329)	23.0%	28.7%	19.6%	6.4%	22.3%	100% (n=592)
ドイツ	20.8%	38.9%	22.5%	2.7%	15.2%	100% (n=414)	17.6%	39.4%	19.5%	2.4%	21.2%	100% (n=591)
スウェーデン	6.8%	29.1%	43.0%	4.4%	16.7%	100% (n=412)	4.9%	35.1%	37.9%	3.4%	18.7%	100% (n=974)
	p<0.001						p<0.001					

(注)「あなたが、最終的に収入の伴う仕事を辞めたのは何歳のときか」(Q17)に対する回答結果。

## 6. 単身高齢者の生きがいの規定要因

### (1) 単身高齢者の生きがい

次に、単身高齢者の生きがいについて考察していく。4か国の単身高齢者に、「現在、どの程度生きがい(喜びや楽しみ)を感じているか」(Q36)を尋ねると、「大変感じている」と「多少感じている」を合計した比率は、アメリカ 82.7%、スウェーデン 75.2%、日本 52.6%、ドイツ 50.5%となっていて、日本はドイツと並んで、生きがいを感じている単身高齢者の比率が低い(図表 12)。

一方、「まったく感じていない」と「あまり感じていない」の合計は、日本 29.4%、ドイツ 16.7%、スウェーデン 14.0%、アメリカ 11.6%となっていて、生きがいを感じていない人の比率は日本の単身高齢者が最も高い。

図表 12 単身高齢者は、現在、どの程度生きがい(喜びや楽しみ)を感じているか(Q36)

	大変感じている	多少感じている	どちらとも言えない	あまり感じていない	まったく感じていない	合計
日本 (n=199)	16.4%	36.2%	18.1%	24.9%	4.5%	100% (177)
アメリカ (n=362)	52.1%	30.6%	5.7%	7.4%	4.2%	100% (353)
ドイツ (n=430)	21.2%	29.2%	32.8%	14.6%	2.1%	100% (424)
スウェーデン (n=456)	33.2%	42.0%	10.8%	10.2%	3.8%	100% (443)
	p<0.001					

### (2) 単身高齢者の生きがいの規定要因

では、単身高齢者の生きがいは、どのような要因によって規定されているのだろうか。ここでは、「健康」「他者とのつながり」「経済的困窮に対する意識」などと「生きがい」との関連性をみるため、重回帰分析を行っていく。

#### A. 分析方法

従属変数は、「現在、どの程度生きがい(喜びや楽しみ)を感じているか」という質問(5件法)に対して、「大変感じている」を5、「まったく感じていない」を1として、数値が高いほど生きがいを感じる量的変数(1~5)とする。

説明変数は、「年齢」「男性ダミー」「子どもありダミー」「仕事をしているダミー」「健康ダミー」「会話頻度(5段階)」「病気や日常生活の作業で頼れる人がいるダミー」「家族・親族で役割ありダミー」「社会活動参加ダミー<sup>6</sup>」「経済的に困っていないダミー<sup>7</sup>」である。各国別にみた変数の記述統計量は、図表 13 の通りである。

<sup>6</sup> 「社会活動参加ダミー」は、「現在社会活動に参加している人」あるいは「現在、社会活動に参加していないが、過去に社会活動に参加したことのある人」を1として、それ以外を0としている。

<sup>7</sup> 「経済的に困っていないダミー」は、「困っていない」あるいは「あまり困っていない」を1として、それ以外を0としている。

図表 13 記述統計量

	日本					アメリカ				
	有効 度数	最小値	最大値	平均値	標準 偏差	有効 度数	最小値	最大値	平均値	標準 偏差
年齢	182	60	98	74.53	7.947	361	60	99	75.63	8.645
男性ダミー	182	0	1	0.40	0.491	361	0	1	0.33	0.470
子どもありダミー	176	0	1	0.64	0.482	347	0	1	0.79	0.408
仕事をしているダミー	179	0	1	0.28	0.450	358	0	1	0.16	0.372
健康ダミー	174	0	1	0.45	0.499	357	0	1	0.67	0.471
会話頻度 (5段階)	177	1	5	2.93	1.502	355	1	5	3.68	1.491
病気や日常生活の作業で頼れる人があるダミー	182	0	1	0.79	0.411	361	0	1	0.85	0.354
家族・親族で役割ありダミー	182	0	1	0.57	0.496	361	0	1	0.94	0.240
社会活動参加ダミー	182	0	1	0.60	0.491	361	0	1	0.80	0.404
経済的に困っていないダミー	177	0	1	0.55	0.499	359	0	1	0.74	0.437

	ドイツ					スウェーデン				
	有効 度数	最小値	最大値	平均値	標準 偏差	有効 度数	最小値	最大値	平均値	標準 偏差
年齢	425	60	96	72.54	8.374	458	60	102	74.73	9.224
男性ダミー	425	0	1	0.33	0.470	458	0	1	0.38	0.486
子どもありダミー	425	0	1	0.81	0.393	446	0	1	0.80	0.403
仕事をしているダミー	424	0	1	0.25	0.434	429	0	1	0.25	0.432
健康ダミー	422	0	1	0.29	0.453	442	0	1	0.63	0.483
会話頻度 (5段階)	423	1	5	3.93	1.256	446	1	5	3.75	1.518
病気や日常生活の作業で頼れる人があるダミー	425	0	1	0.95	0.222	458	0	1	0.86	0.349
家族・親族で役割ありダミー	425	0	1	0.85	0.353	458	0	1	0.85	0.354
社会活動参加ダミー	425	0	1	0.56	0.496	458	0	1	0.58	0.494
経済的に困っていないダミー	424	0	1	0.72	0.451	448	0	1	0.79	0.411

## B. 分析結果

日本の単身高齢者について、生きがいの規定要因を分析したところ、分析モデルは有意となっている (図表 14)。そして、生きがいの規定要因をみると、統計学的に有意な説明変数は、「年齢」「健康ダミー」「会話頻度」「家族・親族で役割ありダミー」である。これら要因は、単身高齢者の生きがい感に正の影響をもたらす規定要因となっている。

図表 14 4か国別の単身高齢者の生きがい感の規定要因(重回帰分析)

	日本			アメリカ		
	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率
男性ダミー	-0.107	-0.045		-0.118	-0.050	
年齢	0.021	0.144	+	0.001	0.008	
子どもありダミー	0.260	0.109		0.046	0.017	
健康ダミー	0.578	0.251	**	0.320	0.135	*
仕事をしているダミー	0.110	0.043		-0.020	-0.007	
会話頻度	0.156	0.202	*	0.121	0.162	**
病気や日常生活の作業で頼れる人があるダミー	0.052	0.019		-0.246	-0.079	
家族・親族で役割ありダミー	0.297	0.128	+	-0.212	-0.045	
社会活動参加ダミー	0.060	0.026		0.425	0.158	**
経済的に困っていないダミー	0.103	0.045		0.299	0.117	*
(定数)	0.613			3.292		***
n	157			324		
決定係数	0.213			0.114		
自由度調整済み決定係数	0.159			0.085		
回帰のF検定	F値 3.954、有意確率 0.000			F値 4.018、有意確率 0.000		

	ドイツ			スウェーデン		
	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率
男性ダミー	-0.174	-0.078		-0.142	-0.064	
年齢	0.005	0.038		0.003	0.025	
子どもありダミー	0.098	0.037		0.140	0.051	
健康ダミー	0.328	0.141	**	0.547	0.241	***
仕事をしているダミー	-0.017	-0.007		0.135	0.054	
会話頻度	0.073	0.087	+	0.082	0.113	*
病気や日常生活の作業で頼れる人があるダミー	0.401	0.080	+	-0.121	-0.040	
家族・親族で役割ありダミー	0.410	0.137	**	0.269	0.083	+
社会活動参加ダミー	0.256	0.121	*	0.108	0.049	
経済的に困っていないダミー	0.272	0.117	*	0.153	0.058	
(定数)	1.717		**	2.640		***
n	419			388		
決定係数	0.115			0.125		
自由度調整済み決定係数	0.094			0.102		
回帰のF検定	F値 5.314、有意確率 0.000			F値 5.389、有意確率 0.000		

(注) \*\*\* p<0.001 \*\* p<0.01 \* p<0.05 + p<0.1

アメリカの単身高齢者について、生きがいの規定要因を分析したところ、分析モデルは有意となっている。そして、生きがいの規定要因をみると、統計学的に有意な説明変数は、「健康ダミー」「会話頻度」「社会活動参加ダミー」「経済的に困っていないダミー」である。

ドイツの単身高齢者について、生きがいの規定要因を分析したところ、分析モデルは有意となっている。そして、生きがいの規定要因をみると、統計学的に有意な説明変数は「健康ダミー」「会話頻度」「病気や日常生活の作業で頼れる人がいるダミー」「家族・親族で役割ありダミー」「社会活動参加ダミー」「経済的に困っていないダミー」である。これらすべての要因が、生きがい感に正の影響をもたらす規定要因となっている。

スウェーデンの単身高齢者について、生きがいの規定要因を分析したところ、分析モデルは有意となっている。そして、生きがいの規定要因をみると、統計学的に有意な説明変数は、「健康ダミー」「会話頻度」「家族・親族で役割ありダミー」である。これらすべての要因が、生きがい感に正の影響をもたらす規定要因となっている。

4か国全てにおいて、統計学的に有意な説明変数は「健康ダミー」と「会話頻度」である。一方、「会話頻度」以外の他者とのつながりに関する有意な説明変数をみると、「家族・親族で役割ありダミー」は、日本、ドイツ、スウェーデンで有意な説明変数となっている。「社会活動参加ダミー」は、アメリカとドイツで有意な説明変数となっている。「病気や日常生活の作業で頼れる人がいるダミー」は、ドイツで有意になっている。このように、「他者とのつながり」に関する変数は、多くの国で生きがいと有意な関連性をもつ傾向にある。ただし、どの変数が有意となるかは、国ごとに異なる。

一方、経済的な状況を示す「経済的に困っていないダミー」は、アメリカとドイツで有意な説明変数となっている。

## 7. まとめ

以上のように、生活上のリスクや生きがいに関連して、日本の単身高齢者は、他の3か国と比べて下記の4点の特徴がある。

第一に、他者とのつながりに関して、「会話頻度」「病気や日常生活に関して頼れる人の有無」「家族・親族の中での役割の有無」といった項目をみると、日本の単身高齢者は他者との関係性が弱い。第二に、日本の単身高齢者は、身体機能が低下した場合に「自宅に留まりたい」と考える人の比率が低く、「高齢者用住宅／老人ホーム」を希望する人の比率が高い。住宅の問題やインフォーマルな人間関係が他国よりも弱く、自宅での生活を継続することに不安をもつのではないかと推察される。第三に、日本は、経済的に困窮していると感じる単身高齢者の比率が高く、働くことで補う人が多い。第四に、生きがいを感じている単身高齢者の比率が、他の3か国に比べて低い。

次に、各国ごとに単身高齢者の生きがい感に影響をもたらす規定要因をみると、どの国も「健康であること」とともに、「他者とのつながり」に関連した変数が生きがい感に正の影響を与える規定要因になる傾向がみられる。ただし、どの変数が有意な変数となるかは、国によって異なる。

先述の通り、日本の単身高齢者は、「他者とのつながり」が他の3か国よりも弱い傾向がみられた。今後、単身高齢者が生きがいをもって生活していくには、別居家族のみならず、友人や近所との人間関係を含めて、他者とのつながりを強化していくことが求められるだろう。

(丁)